

9カ月の男児，受傷5日後に末梢骨片の内方へのギブス内転位を認め，本損傷と診断し，観血的整復固定を行なった。症例2は7歳女児，キルシュナー鋼線固定術後6週にて，前方への転位を認め，本損傷を疑い，再度，観血的整復固定を行なった。2例とも Salter-Harris のII型であった。本損傷は単純X線における鑑別診断が難しく，肘関節脱臼，または，外顆骨折と誤診されることがない。Radiocapitellar line, anterior humeral lineなどの補助線が，読影上の point となることを指摘した。また Holda らによれば，小児上腕骨下端部骨折の2.6%との報告があり，極めて稀なものではないと考えられ常に念頭に置くべき損傷と言える。

37. 頸椎骨折3例に対する Halo Vest の使用経験

鬼頭正士，高田俊一（八日市場市立）

症例1：31歳男性。乗用車運転中追突され受傷。Hangman's fracture の診断にて即時 Halo vest を装着し起立歩行を許可した。症例2：46歳男性。自転車にて走行中転倒し受傷。C4-5 脱臼骨折の診断にて universal tong により持続牽引後，頸椎前方固定術を施行した。術後 Tong に vest を装着し早期離床を行った。症例3：18歳男性。バイクで走行中転倒し受傷。第6頸椎圧迫骨折の診断にて universal tong により牽引後 vest を装着した。Tong 装着中ピン刺入部の感染やピンのずれなどの合併症を生じたが骨癒合は良好である。以上3例の異なった頸椎骨折に対し，Halo vest による外固定を行ない良好な結果を得たので報告した。いずれの症例も早期離床が可能であり，長期臥床による苦痛や筋力低下もなく，頭蓋直達牽引に比べて非常に有用であると考えられる。

38. 特発性側彎症における Short Brace の近隔成績

新井貞男，大塚嘉則，斉藤雅人
（国立千葉東）

特発性側彎症に対する，千葉大式 short brace 療法の近隔成績を報告した。装具療法により，single curve, double curve のいずれにおいても，5°以上の悪化は見られず，Milwaukee (MB) 療法と遜色のない結果を得，千葉大式 short brace は MB にとって代れるものではないかと思われた。また，装具の part time wear に移行する時期は，初潮後2年を目安にできるのではないかと思われた。

39. 脊柱後彎症に対する新しい Instrumentation の力学的安定性について

中田好則，北原 宏，南 昌平
高橋和久，岡田昌毅（千大）

40. 動力学的にみた脊椎骨骨梁分布の CT による検討

斉藤康文，後藤澄雄（千大）
大塚嘉則（国立千葉東）
豊田 敦（国保成東）

CT を用い OPLL に伴う椎体骨梁分布の変化に関し検討した。対象は非 OPLL 群26例，OPLL 群15例計41例105 slice である。方法は CT 像を microdensitometer で測定しそのパターンを画像解析機で測定した。加齢変化として，椎体骨梁は後方に密な分布をとる傾向を認めたが，OPLL 群ではその傾向は一層顕著で前方より後方へ漸次密な分布を呈した。この結果は，従来の脊柱矢状面の検索で得られた結果同様，OPLL の力学的因子との関連を強く示唆された。

41. Extraforaminal Lateral Disc Herniation の1治験例

坂本雅昭，富田 裕，高山篤也
和田佑一，篠原 裕（金沢病院）

- 46歳女性，L₅/S₁ 間の extraforaminal lateral disc herniation の1症例を経験したので報告した。
- 本症例は myelography では，有意な所見は呈しなかったが，discography 及び disc-CT にて確定診断がなされた。
- 臨床症状で腰椎椎間板ヘルニアが疑がわれ，myelography で所見を呈しない場合，本疾患も念頭において，診断を進めていくことが大切であると思われる。

42. CT にて診断された腰椎椎間板ヘルニア症例

宮本和壽（県立東金）
大木健資（国立国府台）
三枝 修（成田日赤）
広瀬 彰（千葉市立海浜）
高橋和久，高田啓一，三村雅也
（千大）
高田俊一（八日市場市立）

千葉大整形外科外来において，腰椎椎間板ヘルニアと診断され，単純 CT scan にてヘルニアを確認しえた症例に関し，日整会判定基準 (JOA score) にもとずき臨床症状の推移を検討した。対象は50歳以下の53例であ

り、このうち29例に手術が施行された。(1) 手術例は、保存例と比較すると初診時より JOA score が低く、主として歩行能力・SLR に差を認めた。また初診時15点未満の症例では、手術に移行するものが多い傾向にあった。(2) ヘルニア高位、突出部位における JOA score の有意差は認められなかった。(3) 10歳代の腰椎椎間板ヘルニアは、他の年代に比較して JOA score の改善が悪く、また40歳代の場合は、初診時 JOA score が低い傾向にあった。

43. 帯広厚生病院における腰椎前方固定術の治療経験

西山 徹, 小森吉夫, 上徳善也
重信恵一, 井上雅之(帯広厚生)

44. 頸椎黄色靭帯石灰化の1例

西川 悟, 三枝 修, 山本日出樹
(成日日赤)
斉藤康文 (千大)

45. 頸椎黄色靭帯石灰化の1例

松野博明, 高橋淳一, 小林絃一
中村哲雄, 林 謙二, 小林 彰
前田勝久, 久我哲也(千葉労災)
渡部恒夫, 後藤澄雄, 土田豊実
斉藤康文 (千大)

今回我々は72歳男性の頸椎黄色靭帯石灰化症を経験し laminectomy 施行後良好な成績を得たので報告した。主訴は歩行障害, 両手指巧緻運動障害, 四肢のしびれであり発症から2カ月で ADL 障害を見る様になり入院となる。精査の結果 C₁₋₅ の混合型後縦靭帯骨化症と C₄₋₅ 黄色靭帯石灰化症を確認した。手術は C₃₋₄ の flowing と C₅₋₆ の laminectomy を行った。術後経過は良好で JOA score は、術前の5点から13点と改善した。摘出標本病理像および microradiogram から本症は骨化症と明らかに区別して考えるべきものであった。なお石灰化成分は、リン酸 Ca であった。本症発生原因を検討した結果：頸椎の局所的な hypermobility が最も示唆された。

46. 過去3年間の当院における胸髄疾患について

丸田喜美子, 堂後昭彦, 遠藤富士乗
(船橋市立医療センター)

47. SAH を初発症状とした頸部髄外腫瘍の1例

李 笑球, 豊田 敦(国保成東)
湯山琢夫 (千大)

48. 脊椎外科に於る術中エコー

望月直人, 坂巻 皓, 小林健一
松岡 明, 米沢孝信, 岡本 弦
小野智敏 (鹿島労災)

術中、脊髄の状態を real-time に知る目的で、昭和61年7月以来脊椎外科に於て術中エコーを施行している。使用装置は、B-mode, real-time convex scanner, 5 MHz である。症例は、頸髄症13例、硬膜内髄外腫瘍1例である。結果：1. 後方除圧後の前方要素を中心とした脊髄の除圧状態の確認に有用であった。2. 脊髄腹側にある腫瘍の存在部位の決定、及び摘出後の効果判定に有用であった。3. 髄内病変では特に術中エコーの有用性は高いと考えられる。

49. 脊髄後正中中隔切開法の検討

三井公彦(北里大・脳外)

50. 脊髄動静脈奇形に対する根治的塞栓術

—第3報—塞栓術における最近の進歩

湯山琢夫 (千大・放射線)
鎌田 栄 (エッセン大学)
李 元浩 (君津中央)
豊田 敦, 李 笑球(国保成東)
栗原 真, 岩崎伸行, 林 宗寛
(川鉄病院)

1982年より脊髄動静脈奇形に対し Ivalon による根治的塞栓術を導入し、これまで12例を経験した。この間塞栓術に関して種々の改良が加えられたが、最近の進歩は次の4点に要約される。1. calibrate された Ivalon の登場により粒子サイズの選択が容易かつ厳密になった。3. DSA 装置を使用することにより、塞栓に要する時間・造影剤使用量を節約できる。3. MRI により非侵襲的な診断および塞栓後の経過観察が可能となった。4. 椎骨動脈より分岐する feeder に対しても, superselective catheterization を行うことにより塞栓が可能となった。

51. 習志野第一病院における老人外傷の観血的治療

鈴木昌彦, 三橋 稔, 熊谷好正
染屋政幸 (習志野第一)
林 輝彦, 山崎正志 (千大)

過去10年間に当院で観血的治療を施行した65歳以上の老人外傷は236例で、その中でも大腿骨頸部骨折は60.3%と最も多かった。大腿骨頸部外側骨折には、Ender na-